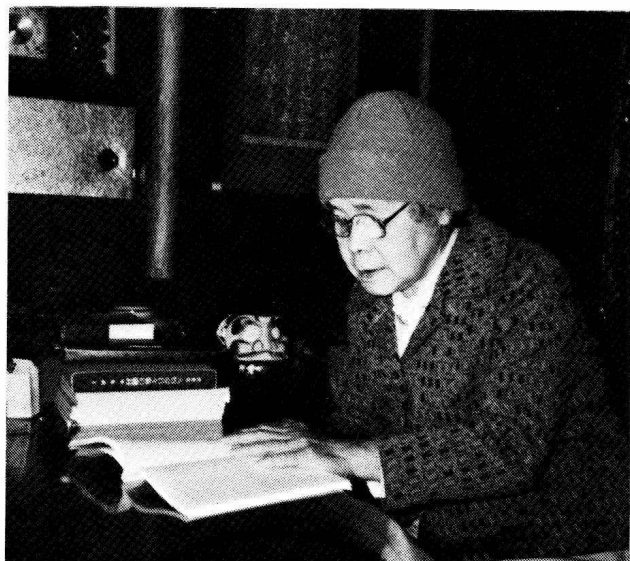


第五詩歌集

郷愁の路

中井達子

第五詩歌集
郷愁の路



中井達子

目次

の部(詩・歌謡詩・童謡)

時間……………	1
ある日の景……………	4
子供ごろ……………	7
夏みかん……………	11
五月の最后の日……………	15
遠足……………	16
絢子(一)……………	22
絢子(二)……………	27
絢子(三)……………	30
太陽(一)……………	35
太陽(二)……………	37
夜……………	42

歌謡詩

ぼくの幼稚園……………	44
私にください……………	50
医師と私と薬と……………	51
目が悪いばかりに……………	57
木や花への連想……………	60
私も……………	63
眠れぬ夜……………	67
悲しみはこだまにのって……………	71
ある空想……………	75
子供と蝶……………	78
こんな男……………	82
無理な生活……………	84
うつしえ……………	86
小鳥……………	89
ひとりがいいの……………	92

わたし……………	94
あなたの瞳……………	97
私が入院したら……………	99
解決……………	101
眠れぬままに……………	104
誰かと誰か……………	107
私の近所……………	109
月夜……………	111
月……………	113
どこかへ行きたい……………	115
入院の夫……………	118
何もしないで……………	120
受話機をおいて……………	123
二人の道……………	126
恋の流浪人……………	129

短歌の部

この道に迷う……………	132
街の灯……………	135
だって……………	137
花の道……………	139
うそつき……………	142
命……………	145
二日月……………	147
童謡 かわいそう……………	149
みじめな景……………	152
あの子もこの子も……………	154
柿……………	155
春を待つ……………	158
夫逝く……………	161
惜しき時間……………	167

園児マラソン	169
絢子(一)	170
絢子(二)	173
(1) 風をひいた絢子	173
(2) 癒えた絢子	176
いとしい孫	178
古き歌	180
整理せぬ本	182
建国の日	184
通院のかえり道	185
悔恨	187
退職后	188
季	191
思い出	192
昼のニュース	194
牡丹の花	196

大きな禍牛	198
炬燵	199
黄の蝶	201
同窓会	203
夕映え	204
宿なしの猫	206
鮭	208
日輪	209
雪降りて	210
生あれど	212
おり／＼	213
過ぎゆく日々	215
無人の駅	217
夜の電話	218
いさかい	220

げんげ田	222
四季さまざま	224
勝負	226
なつかしい道	228
私たちがうたったわらべ歌	231
あとがき	245

時間

遂最近ではあるけれど

私は晩年ということに興味を持ち

偏見を持つことを忘れた。

美男、美女でなくとも

おだやかな性格で

真剣に斬新な感覚を持ち

全世界の動きに目をやり

わたくしを忘れる。

私の家の庭には春が来ると梅が匂い、桜が咲く。

どの世界からも切りはなされて

ぼんやり生きているような人間でも

鳥が鳴くと嬉しいし

かわるがわる咲き誇るさまざまの花に酔わされる。

次第に深む老いという環境の中で

人間同志はみな同じ時間というものを持ち

全部が親愛、真実、信頼とまではいかなくとも

やがては相互に関係なく

赤ん坊だって

少年少女だって

みんな同じ時間の中にあり

ひそかに、少しずつ、じゅんじゅんに

老いに向っているのだ。

あたたかい陽ざしの中に咲く花を見ながら

私はひとり何となく

「嗚呼」とうなって空をみた。

誰も気づかないように時はめぐり

昨日きのうは今日けふになり

今日は明日あしたにかわる

私は思わず二度、三度、庭の若葉をみかえしながら
静かに大きく深呼吸をした。

ある日の景

はじらいということを知らない

三、四才の男の子が私の方を向いて

小さな恥部を出して

お小水をはじめた。

最後の一たらしが終ると

その子供はパンツを腰までたくしあげて

前の砂場の方へ一直線に駈けていった。

子供の生理とは

こんなに単純で、気楽で

自由自在なるものかと

一面には感心し

一面には本当に子供でなければ

できない仕業しわざだと

五月晴さつきばれの空を仰ぎながらしみじみ思った。

青葉がだんぐ増して来て

隣の栗畠の栗の白い花がたれ下って

わづかな風に揺れている。

五月とはいいいながら激しい日光に照らされ

砂場の砂はきら／＼と輝いている。

まだ新しい砂だからだろう。

出来上つて間もない遊園地に

何本か植えられた桜の若木の細かい葉が

心地よさそうに少しずつ揺れ

太陽はひそかにその若木をちつと

照していた。

子供ごころ

村山の貯水地でみんなと楽しんだかえり路

西武球場のわき道を通った。

西武球場って広いなあ

きれいだなあ。

朝、家を出る時

「今日は西武と南海の試合のある日だ」と

パパがいつていた。

みたいなあ、みたいなあ

ママはどっちが勝ってもいいというけど

パパは南海が勝てばいいという。

僕もどっちが勝ってもいいけど

あの凄い試合が見たい。

テレビで見るだけでなく

本当の試合が見たい。

今夜は西武が勝つかな

もしかして南海の勝ちになるかな

そんなことを思っているうち

バスは球場のわきの道を通りすぎて

いつか人家のつづく街並の通りへでていた。

でも球場を見ただけでもいい

今まで目の前に見たことはないんだから。

今夜のナイターは

どちらに軍配があがるかな

僕は遠足のことより

西武球場のことばかり考えて家にもどった。

僕はその晩

たくさんの花火の上る夢をみた。

多分西武が勝ったのだろう。

パパはずい分残念だろうと思いながら

まだよく眠っている

パパの顔をそーつとのぞきこんだ。

夏みかん

そうだ、あの時

あの人と私は大きな夏みかんを

半分ずつにして食べたのだ。

あの人は夏みかんに

お砂糖をたっぷりつけ、